

はじめに

いにしえの昔から、この日本には、「病は氣から」ということわざがあります。科学的な合理的精神から考えれば、「心と身体は別」「そんなのは迷信」と捉えるのが自然かも知れません。ですが、英語圏の国々にも「Fancy may kill or cure.（空想は人を殺しも生かしもする）」という同じような言い回しがあるので、どうやら昔の人々は、洋の東西を問わず、似たようなことを感じていたようです。

しかし、その後の科学の発展とともに、意識や生命もおしなべて物質の力学的作用により生じると考える唯物論（厳密には機械論的唯物論、言い換えれば物質一元主義、以下同じ）が広く受け入れられるようになり、このような考えは次々と切り捨て去られていきました。

ところが、近年になって、その科学万能主義に限界が見え始め、再び様相が変化してきたようです。

にわかには信じがたいかもしれませんが、量子論、相対性理論以降の近代物理学の世界における物質の捉え方は、いまだにニュートン以来の古典力学が支配的な世間一般の常識とはかけ離れたものになっており、もはや唯物論、物質主義の根柢は疑わしくなっているのです。

私自身、医師としての経験を重ねるにつれ、この「病は気から」という言葉の中に否定出来ない何かを感じるようになっていきました。今や我々は、この唯物論から離れ、心と身体の間を再度考え直し、この言葉の持つ意味を今一度捉え直す必要があるのかもしれません。

現代の物理学で起こりつつあるこの常識の大転換を一言で表現するなら、「見える世界の科学から、見えない世界の科学への変化」と言ってもよいでしょう。ノーベル物理学賞を受賞された小林誠博士、益川敏英博士が予言した6種類のクォークも、先ごろ発見されたヒッグス粒子も、まず理論が先行し、その後実験装置が進化するに従ってその存在が証明されたのです。

ですから、これまでは見ることも観測することも出来ないゆえに科学の対象になり得

なかった「見えない世界」のものであっても、今後観測法が進化していけば、その存在が証明され科学の対象として認知される可能性がある、と私は考えています。目に見えない心でさえも、エネルギーや情報として測定や認識される日が来ないとも限らないのです。

表題の「がんの神様」という言葉も、一見したところ非科学的に思えることでしょう。そればかりか、忌々しいがんを神様に仕立てるとは何事か、とお叱りを受けるかもしれません。

しかし、これは、私に大きな影響を与えてくれた患者さんが使っていた言葉で、私にとっては決して忘れることの出来ない大切な一言なのです。

自分の身体から生じたがん細胞は、本来決して憎むべき相手ではないはずなのです。それどころか、人生において大切なことを気づかせてくれるメッセージを携えていることさえあるのです。

「がんの神様、ありがとう」という一文には、がんをも含めた自分自身を生かしている大自然の大きいなる営み、そのすべてに対する畏敬の念と感謝が込められています。この

本を読み終えられる頃には、その真意が必ずや分かっていただけのことと思います。

本書では、興奮すべきパラダイムシフト、常識の大転換の時代を迎えるに当たり、東洋哲学と量子論の接点とその奥深さについて考えてみたいと思います。

西洋科学と東洋哲学という従来は相反するものと考えられてきたこの両者が、あたかも共鳴しあうかのように共に唱え始めた新しい叡智は、身体の健康のみならず充実した人生を歩むうえでも大いに役立つてくれることでしょう。